
ただひたすらに、欲しかったもの。

yayu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ただひたすらに、欲しかったもの。

【Nコード】

N3647D

【作者名】

yayu

【あらすじ】

ただ単純に笑えることができたのなら。

死にたいと、叫ぶ時。(前書き)

久々に書いた一人称視点。お嫌いな方は速やかにバックを。悲話です。

死にたいと、叫ぶ時。

「死にたいの」

震える声でそう紡ぐ。その言葉は僕の胸に雪のように染み入った。

俯いている彼女の黒い髪は小刻みに揺れていても、弱々しい存在に思える。

今、何が彼女をこのようにさせているのか、僕には分からなかった。

しばらく無言でいると、彼女はおもむろに顔をあげる。

——泣いてはいなかった。

ただ、死んだように何も映っていない瞳が、宙に淀んで見えた。

「何で生きなきゃいけないのかな」

その疑問は、殺風景な部屋に静かに響き渡り、消失。

僕は未だ一言も発せないでいた。

彼女は何かを胸の内から無理矢理に出すように、絞り出す、声にならない声を。

「どうして私はこの世に生かされたの」

言って欲しくなかった。僕は彼女を抱き締める。

掴んでいなければ、どこかに消えてしまっただったから。

細い、彼女の体から、生きているアカシが、とくとくと伝わってきた。

今ここに、君がいる奇跡を僕は喜ぶべきであるのか、分からなかった。

未来も、涙で視界が霞むのかのように、濁っている。見えない。

分かるのは、彼女が“生”に対して執着していないっていうことくらい。

窓の外は、僕達を嘲笑うかの如く、卑しい程に綺麗な晴天だった。

杞憂。

彼女はその後結局一言も言葉を発しなかった。ただ僕に大人しく抱き締められていた。

僕と彼女は、違う世界にあるようだ。

近いようで遠い。まさにそんな感じ。

暫くして彼女は僕からそつと離れると、自分の部屋に引き籠もる。ガチャリ、と無機質な音を立てて鍵を閉めた。

僕は溜め息をつきながらソファに体を預ける。

リモコンを操作し、テレビのスイッチを入れる。チャンネルを回してみたが、面白そうな番組はやっていなかった。

右の薬指にはめていた指輪がふと目に留まる。

シルバーでなんの飾りもないシンプルなつくり。僕はそれにそつとキスを落とした。

それは彼女に誕生日プレゼントにと、貰った物だった。

別に付き合っているわけではない。しがないルームメイトではあるけれど。

たまたま同じ大学で、たまたま同じ講義を受けていて、たまたま話をするようになり、たまたま彼女が独り暮らしするお金がないというので一緒に暮らすと話を持ちかけ、たまたまルームメイトになったただけだ。

我に返れば、有名なバラエティー番組を瞳孔に映している自分がいた。

司会が何かを言って、スタジオが笑いの渦に包まれる。それを僕は冷めた目で見ていた。

——くだらないしまらない。

こんなことで笑えてるなんて平和な奴らだ。

ぷつつん。

電子音が聞こえ、賑やかだったリビングが一瞬にして静まる。静まった部屋にはカチカチと、時計が秒針を動かす音くらいしか聞こえない。

やがて、彼女の部屋の方から嗚咽を抑えるような、くぐもった声が僕の耳に入ってきた。

自責のシガラミ。(前書き)

リスカシーンあります。悪しからず。

自責のシガラミ。

——私が狂うのは、いつも些細なことで。

「死にたいの」

私は彼の反応が怖くて俯きながらそう言った。

幻滅した？　いつものことだから、呆れてる？

ルームメイトの彼はこんな私を見ていつも何を思うのだろう。

ふと気になって顔を上げる。

彼は私を心配そうな顔つきで見つめていた。

——ねえ。

それは私に同情してるの？

友達として本当に心配してくれているの？　……それとも。

突然今朝の出来事がフラッシュバックする。私はある淡い期待を頭から取り除く。

「何で生きなきゃいけないのかな」

私の声が部屋に響いて消えゆく。

何だか虚しさだけが残る。

彼はまだ何も言わない。

私が言えなくしてるの？

なんか答えてよ。

「どうして私はこの世に生かされたの」
もう擦れ声しか出なかった。

永遠のように頭の中をループしていた問い。

ああ、こんな醜い私に生きる権利なんてないでしょうね。
さつさと死ぬることができたなら――

そんな思考が頭の隅を過った時、温もりが私を支配した。彼が私を抱き締めたのだ。

今の私は、それを為す術もなく受け入れるしか無かった。

……また、頼ってばかり。

彼の独特な香りが鼻を優しくくすぐる。その匂いで心が少し落ち着いていた。

そのせいもあってか冷静になってみると逆に私の醜さが浮き彫りだつて、自分に嫌悪感を抱いた。

こんな、こんな汚い私に――触れないで。触らないで。

私は温かかったものから自ら離れると、距離を置くかのように自分の部屋に引きこもった。もちろん鍵をきちんと閉めて。

――ごめんなさい。

罪悪感ばかりがつのる。

何で私は頼ってしまうの？ 彼を、彼を解放しなきゃ。

——私が貴方の重荷になってしまいうらいなら私は……。

机の引き出しからカッターナイフを取り出した。

私の愛用しているもので、切れ味は中々良かった。

私はその銀色に光る刃をチキチキと出すと、手首に押しあて一気に引いた。

鋭利な冷たい刃がまだきめ細かい肌のにめり込み、後には赤い線が残った。

ぷつぷつと、血の珠が線からできる。

「……っ」

その痛み以上に私は自分に憤りを感じていた。

真っ赤な血はとどまることを知らずに溢れてゆく。

今日は相当深くまで切れたのだろう。

結局、私はまだ死ぬことができない。怖くて。

私はその場に蹲すくみると、声が漏れないよう、それでも何かを吐き出すかのように嗚咽を漏らした。誰にも見せぬ涙を流しながら。

——生きていて、ごめんなさい。

自責のシガラミ。(後書き)

予め言いますが軽い気持ちで書いては 아닙니다。

葛藤と焦燥と。：前編

「じゃあ、僕は行ってくるからね」

玄関で彼女がいるであろう部屋に声を掛けた。――無反応。

最近ではいつものことだったから僕は大きくも止めずに家を出た。

外は随分と冷え込んでいる。

古いのか、中々還暦のある雰囲気だったがそれでも構造はしっかりしているようです。きま風は無かったので僕はこのアパートを気に入っていた。

二階から階段を使い、アパートを出る。

肌を刺すような冷たい風が身体に吹き付けてきたために思わずマフラーを巻き直しながら寒空を仰ぎ見た。

――綺麗な、冬晴れだった。

気温と裏切るその天気には僕は内心毒づきながらも、駅へと向かった。

「あの！」

賑わう食堂でそんな細い声が聞こえた。

僕は自分が呼ばれているとも知らず、聞き流していた。

「あの……」

トントンと肩を叩かれ、声の主を振り返った。

「えっと、君は確か」

「山下詩織です」

僕の問いに即答してくれた山下さんは大学の中では彼女の一番身近

にいた存在だったと思う。
よく彼女と一緒にいるためか、僕も前に二、三度会話をしたことがある。

——名前を覚えてなかったのは僕の記憶力のせいだ。

「山下さんが僕に聞きたいことってのは、あの子のことかな？」

山下さんは躊躇なく頷いた。

「どうやら“あの子”で通じたようだ。」

「最近、来てないでしょう——？ 携帯にメール入れても返信来ないし電話も繋がらないし……心配なんです」

口から吐息をつき、目を伏せる。マスカラを塗った長い睫毛が肌に陰って女の色気を感じた。

「——で、ルームメイトの僕に彼女の安否を確かめたかったわけね」「安否って、大袈裟ですね」

僕の、冗談を少し混ぜた言葉に控えめな笑い顔を作ってくれた。

「……彼女は、大丈夫だよ。体の具合が少し思わしくないみたいだけど」

まさかこんなにも彼女のことを心配している山下さんに“死にたいと泣いていた”などと言えるはずがない。

「そうですか」

あの子にお大事にとお伝えください、と山下さんは丁寧に一礼して人々の雑踏の中に消えていった。

「良かったのか？ 本当は体調が悪いわけじゃないんだろう」

僕が目の前のおムライスに意識を集中しようとした時、前方から聞き慣れた声が耳に入る。

せっかくのランチタイムを邪魔された僕は不服そうに——そして心を見透かしたような言葉に驚きつつそいつを見た。

「悠……何で分かったんだ」

「そりゃあお前から色々聞かされてきたし、ただ具合が悪いわけじゃないってくらい分かるさ」

佐々木悠は、僕の唯一の相談相手かつ悪友という中々いいポジションにいる奴で、その洞察力に僕はいつも驚かされる。

「そっか」

「それで、今はどんな感じなんだ？」

悠は箸の先を僕に向け、偉そうに言葉の続きを待つ。

「死にたい、ってさ」

自棄的に呟きスプーンを置いた。食欲はもう無い。僕は堪らなく、彼女が心配になった。

「お前が焦ってもしょうがないことだ。口先だけの言葉を呟くより、今は傍にいてやれ」

悠はそれだけ言うと、僕の放棄したまだ手の付いていないオムライスを目敏く見つけ、それを自分の方に引き寄せると夢中で咀嚼し始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3647d/>

ただひたすらに、欲しかったもの。

2010年12月5日11時39分発行